

謹賀新年



デア ハーフエン Der Hafen

 Nr. 77
 2026年 1 月-3月

永続対立の時代と日独の架け橋

横浜日独協会会長 成川 哲夫

新しい年を迎え、会員の皆さまにはお健やかに過ごしのことと存じます。昨年も横浜日独協会の活動に温かいご支援とご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。振り返ってみますと、世界のニュースは一年を通じて、決して穏やかな話題ばかりではありませんでした。ロシアによるウクライナ侵攻はなお終わりが見えず、中東でも深刻な紛争が続いています。米中の対立も長期化し、かつて「平和の配当」と呼ばれた時代から、緊張と対立が常態化した「永続対立」の時代へと移りつつあると感じさせられる出来事が相次ぎました。

こうした中で、日本とドイツはともに、戦後長く自由で開かれた国際秩序の恩恵を受けてきた国として、またアメリカとの同盟関係に安全保障を依存してきた国として、難しい舵取りを迫られています。日本はインド太平洋で、中国や北朝鮮という近隣の安全保障上の懸念に直面し、ドイツはヨーロッパの一員として、ロシアの侵略戦争と向き合っています。私はこの 10 年ほど日独双方の有識者が集まる「日独フォーラム」に委員として継続的に参加して来ましたが、昨年 12 月初めにもベルリンで開かれた会合で、こうした課題について議論に参加する機会を得ました。



その成果を両政府に提言として届ける場です。今回の会合では、「新たな世界秩序と日独の対米関係」に加え、経済安全保障やサプライチェーンの課題、さらに「国境を越えた宇宙の活用と日独協力の将来」などが取り上げられました。会議は比較的少人数で行われ、参加者一人ひとりが自らの経験や問題意識をぶつけ合う非常に密度の高い議論となりました。私からは、企業の立場から経済の基盤を支え雇用と税収を生み出している企業と政府サイドの一層緊密な連携を提起しました。宇宙分野については、JAXA とドイツ航空宇宙センター (DLR) による共同研究や、衛星データの防災・気候変動対策への活用、宇宙ごみ対策など、すでに進んでいる日独連携を土台に、今後どのような協力が可能かが活発に論じられました。宇宙というと少し遠い世界の話のように聞こえますが、通信や地図、気象情報、海運・航空の安全確保など、私たちの日常生活や横浜の港湾機能とも深く結びついたテーマであることを、あらためて実感させられました。

日独フォーラムは、日本とドイツの政界・官界・財界、そして学界などの有識者が毎年一堂に会し、その年ごとのテーマについて議論し、

こうした議論に加わりながら、私には横浜と横浜日独協会の活動も頭に浮かんでいました。日独フォーラムは、国家レベルでの安全保障や経済政策、宇宙協力といった「上からの対話」の場と言えるかもしれません。一方で、横浜日独協会の活動は、講演会や根岸墓前祭への協力、オクトーバーフェスト訪問、ドイツゆかりの場所への訪問など、「市民の側からの対話」を少しずつ積み重ねていく営みです。規模もまた扱うテーマも異なることが多いのですが、いずれも日独が長く信頼関係を築き、その上に新しい分野での協力を重ねていくという、大きな流れの中につながっていると感じます。

私はその点に、両者の間の連続性を見い出します。現在の日独関係そのものは、お互いに信頼と友好に支えられた安定した関係にありますが、それでも、世界全体で緊張が高まりやすい時代だからこそ、相手の国のことをよく知り、その社会や文化に親しみを持つ市民が各地にいることは、将来どのような状況になっても揺らぎにくい土台になります。ドイツに関心を持つ日本の学生や、横浜での生活を楽しんでいるドイツ人留学生、そして長年ドイツと縁のある市民の皆さん—こうした人と人とのつながりは、一度できると簡単には消えませんが、宇宙や経済安全保障といった新しい協力分野を支える「見えない基盤」にもなっていくはずです。

横浜は、開港以来、世界に向けて開かれた港町としての歴史を歩んできました。ドイツとの関係も長く、経済・文化・学術のさまざまな分野で交流が続いています。横浜日独協会は、その歴史のごく一部分を預かる存在に過ぎませんが、「永続対立」の時代であればこそ、横浜からドイツへと架け橋をかけ続ける役割は、むしろ重みを増しているのではないかと思います。戦争中不慮の事故で命を落とした人々を悼む根岸墓前祭への協力も、若い世代と共にオクトーバーフェストや音楽会を楽しむことも、その両方が日独関係の厚みを生み出していると感じます。

今年も、例年通りの講演会をはじめとするさまざまな交流に加え、若い世代や新しい会員の皆さまにも参加していただけるような試みを続けていきたいと考えています。ベルリンの日独フォーラムで感じたこと、考えたことも、折に触れて月例会や会報の場で皆さまと共有しつつ、横浜ならではの日独交流のかたちを一緒に育てていければと思います。世界の情勢は、今年も決して楽観できるものではないかもしれませんが、それでも、横浜の日常の中で、ドイツという国に静かに思いを馳せる人の輪を広げていくことは、きっと意味のある営みだと信じています。本年もどうか変わらぬご支援とご参加を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

サンドラ・ヘフェリン氏講演会「ドイツ人は飾らず・悩まず・さらりと老いる」より

会員 川辺 祐香



サンドラ・ヘフェリン氏

敬老の日（9月15日）を少し過ぎた20日、残暑の昼下がり、申込期限一週間以上も前から部屋の定員オーバーの申込者となった人気エッセイストのサンドラ・ヘフェリンさんの講演会

が開催されました。今回の講演テーマは洋の東西を問わず、誰もが直面する「老い」に着目した彼女の著書「ドイツ人は飾らず・悩まず・さらりと老いる」にも記された取材に基づく内容で、次々と紹介される事柄は、いろいろな立場から考えてみる機会となったように思います。

いくつかのエピソードの中で、まず印象に残ったのは『バスの来ない停留所』（Bushaltestelle fuer Demente）の話です。これはレムシャイトにある認知症の介護付き高齢者施設での職員の発案で2006年に作られ、ドイツ全土の介護施設の前に最近では次々と作られているそうです。

認知症の高齢者が徘徊したり、どこかへ行きたいと言いつつ出た時に、無理矢理に納得いかないのに論してみたり、しばらくつけたりせずに施設の前にある『バスの来ない停留所』に座って「バスが来るまで待ちましょうね。」としばらく待っていると、認知症の高齢者はお出かけたつもりになったり、出かけようとしたことを忘れたり、すっかり気分転換して落ち着いて、また施設に帰っていくのだそうです。これを認知症の高齢者を「だまして」良いのか？という批判がないわけでもないそうですが、双方にとって心地よく、良い目的のための「うそ」ならば容認するという考え方が広まっているのだそうです。発想の転換でこんなにも穏やかに認知症高齢者の行動を尊重しながら守る手段があることには、目から鱗が落ちた感がありました。一事が万事、このように一旦立ち止まり、良い結果を導き出すためにはどのようにアプローチをすればよいのかを考えさせられた、冗談のような真剣で心温まるシーンが頭の中で描かれました。

次に、私も常に頭の隅にある『断捨離』との向き合い方が心に留まりました。人は皆、数々の思い出と共に捨てるのには忍びない物に囲まれて、気づくと高く積み上げられた思い出の山に埋もれているものです。大人になるとそんな実家から独立してすっきりと仕切り直して出発するも、それも時間と共に新たな山を築いていくわけです。日本では住宅事情も手伝ってか、それはマイナスのイメージとして捉えられ、終活のスタートは『断捨離』

から！」と謳われている感じがします。私も高齢の両親が住む実家は何十年にもわたる思い出の品の海と山に囲まれており、いつの日か片づけなければいけないわけですが、果たしてそれは元気なうちの「今！」なのか迷っているところに方向性を見出した気がいたしました。元来、良いものを長く大事に使うドイツ人は身の回りの愛着のあるものは簡単には断捨離をしないようなのです。その大前提は要らないものを買わず、本当に気に入った物を大切に作る質実剛健とされているドイツ人のライフスタイルなのですが、生きているうちは人生を楽しみ『断捨離』に時間と心を費やして疲れるのは本末転倒ではないかと、少し自分を納得させる良い口実ができたような気がしました。

高齢者の恋愛、高齢者施設、認知症、終活、死生観、安楽死からお葬式とお墓にまでまつわるエピソードが紹介され、お国柄と文化や宗教の違いもあり日本よりドイツでは柔軟に合理的になっていることがあったり、また介護する側とされる側の考え方、受け止め方には多様性があることを改めて感じ、この世に生を受けた限られた時をより心豊かに過ごすべく時を重ねたいと思いました。この日は講演会後に、横浜山手のYC&ACにおけるオクトーバーフェストにサンドラさんと講演会参加者とともに遊び、「飾らず・悩まず・さらり」とビールを片手に楽しく歓談をして一日を締めくくりました。

大使館 Sommerfest 2025

常任理事 佐藤 恵美



今年の猛暑の名残で“Sommer 夏”の暑さの残る9月17日、ドイツ大使館にて全国日独協会等との友好を図る Sommerfest（夏祭り）が開催され、当会の早瀬名誉会長、向井・南雲両副会長と共にお招きいただきました。

昨年着任されたペトラ・ジグムント大使は日独友好に対する日独協会や関連団体の活動に対して、感謝と今後のさらなる発展を願う挨拶を述べられました。私達一人ひとりとも気軽に言葉を交わしてくださり和やかな雰囲気の中で時が流れました。

横浜以外のドイツ関係の友好団体の方々とも交流できる良い機会でしたが、その中で当会の学生会員の阿部さんが、以前より所属する日独ユースネットワークの代表として、他の若い世代と共に大使より活動のご紹介を受けたことは嬉しいことでした。日独の友好が次世代に引き継がれていくのを目にできるのも、こうした催しのハイライトの一つではないかと感じられるひと時に感謝しております。

中山地区センター多文化フェア



学生会員 三和 花梨

9月28日(日)に、中山地区センターで開催された第3回多文化フェアの国際交流団体活動紹介に、副会長の南雲さん、佐藤さん、三和の3人で参加させていただきました。

今回の多文化フェアでは、東洋英和女学院大学の国際コミュニケーション学科の学生さんが司会進行を務めていました。国際交流団体活動紹介では、南雲さんによる日独協会のこれまでの活動紹介や、シドモア桜の会代表理事の梅本さんの、エリザ・R・シドモアによる日本がアメリカへ贈った桜並木のお話、その他ブラジルと日本の交流を深める会など、貴重なお話や、知らなかった国際交流団体の活動を聞かせていただきました。



多文化フェアでは、カンボジアやラオスなどの方々が作った作品の販売も行っていました。その売上金は現地で、基金として学費などになります。私も今回、ラオス



の方が作った刺繍の入ったハートの形ストラップと、蛇の編み物のストラップを購入させていただきました。どの作品も可愛らしく、個性豊かでした。

今回の多文化フェアで私が1番印象に残ったのは、ウクライナの避難民の方々によるウクライナ国家の合唱です。その前には日本人ヴァイオリニストの澤田さんと、ウクライナのピアニスト、ヤヴォールスキーさんの演奏も聴かせていただきました。澤田さんのヴァイオリンは、曲によって全く雰囲気が違い、ヴァイオリンのことに無学な自分でも圧倒される演奏でした。ヤヴォールスキーさんは、一昨日来日されたばかりと紹介されていたが、旅の疲れなど伝わらないほどの迫力の演奏でした。ピアノの鍵盤が足りないのではないかと思うほどの指の速さで、こんな素敵な演奏を間近で鑑賞することができ、とても貴重な体験になりました。

最後にウクライナの避難民の方々の合唱でした。私は、ニュースやSNSでしかウクライナからの避難民の方は見たことがありませんでした。なので、直接対面して、表情を見て、歌う姿を見た時に様々な感情が溢れました。合唱していた方は、ご高齢の方や、私の母よりも年下に

見える方もいました。そうした多様な年齢層の方々が、母国から遠く離れた日本に来る決断をして、新しい生活を始めるというのはとても勇気も体力も精神力も、多くのものが必要だったと思います。日本に来て母国や、そこにいる親族への心配は晴れず不安な日々を多く過ごしたと思います。しかし、合唱団の方々の歌声はとても力強く、マイクなども無いのに部屋中に響き渡っていました。サビではなんと、日本語バージョンになっており、聴いていてとても不思議な感覚になりました。

国際情勢はいつも複雑で、どれかひとつを悪と決めつけることはできません。それぞれの国や地域の古く深い歴史やその他の国による影響で、亀裂や戦争が起きると私は思います。ですが、誰もが平和に暮らせる世の中を目指し、それを目標にしていくことは大切なことだと思います。その中に、今回合唱してくださった方々や、今起きている争いで苦しい生活を送っている方々の、少しでも明るい未来も目指すことができたら良いと思いました。最近の国際情勢では、日独の関係も良好なのが当たり前とは言えない世の中かもしれません。しかし、お互いの国や文化を知り、好きになる、そんなきっかけを今後の日独協会でも作っていったら良いと思いました。とても勉強になる1日でした。

根岸外国人墓地での墓前祭

常務理事 大堀 聡

第2次世界大戦中の1942年11月30日に、横浜港で発生したドイツ軍艦艇爆発事故の犠牲者を悼む墓前祭が、今年は11月22日に根岸の外国人墓地で行われました。天候にも恵まれ主催者のドイツ大使館武官室、および地元の皆さんを中心として、多くの方々にお集まりいただきました。

昨年同様に東京横浜独逸学園の生徒さんが、先生に引率されて参加し、また当協会からも多数参加いただきました。静岡からわざわざいらっしゃった方もいました。

式はドイツ大使館のラルフ・ベルジケ武官の挨拶に続き、私が日本側を代表して挨拶しました。そして仲尾台中学校吹奏楽部の生徒さんが演奏する中、参加者全員が献花をして終了しました。しかしその後も参加者同士で歓談が続き、交流の輪はなかなか途切れませんでした。



ベルジケ武官と当協会メンバー

「私の研究史」

神奈川大学戸田龍介新学長による講演会

副会長 向井 稔

長く続いた猛暑がようやく終わりに近づき、秋風が心地よく街並みに吹き始めた頃、10月18日(土)に当協会の名誉会員である戸田龍介先生にご講演を頂きました。会場は横浜駅に近い神奈川大学みなとみらいキャンパスをお借り出来ました。

戸田先生は今年4月に、神奈川大学経済学部長や副学長を歴任された後、同校の新学長にご就任され、正に就任後未だ日も浅くご多忙の中、この記念講演会に貴重なお時間を調整頂きました。

また戸田先生は当協会が発足した2010年の当初からお手伝いを頂き、長らく監事として協会の会計やガバナンスのご指導にもお力添えをお願いしてきました、この場を借りお礼申し上げたいと思います。



さて、本日の演題は「戦後日本における農業簿記の研究」という内容で、我々大方の会員からすれば、非常にニッチで難解そうな印象をもち、正に大学の商学系の授業でも聴講

する思いで、はじめは緊張してお聞きしていました。しかし戸田先生のユーモアを交えた、解りやすい説明もあり、徐々に身を乗り出して、また驚きをもって講義?内容に聞き入り、時間の経過も忘れるほどであったという間に1時間半が過ぎました。

我が国の農業会計の特殊性、つまり農家は会計の「記録」を取っていないこと、そもそも複式簿記の発想が希薄であること、農業経営における「コスト」の認識と把握が不十分であるため、役所が「農業所得標準表」を作成して一定の標準値で処理するといった「簡便な会計手法」が一般化して来たこと等々、更には最近よく耳にする「概算金」の算定プロセスの不透明性や「政治と農家票田」の関係性などにも触れて頂きました。

我々門外漢にとっては想定以上に多くの点で驚かされる内容が続出といった印象でした。特に今年は「令和の米騒動」と騒がれたように、米価の急騰に始まり、政府備蓄米の緊急放出、長く続いた「減反政策」の廃止、共同組合組織である「JA」の位置づけなど様々な論議が喧しく行われ、一般の我々にとっても日本の「農業」の在り方を考えさせられることが最近とみに多かっただけに、本日の戸田先生のご講義から多岐にわたるご示唆を頂いたものと思います。重ねて感謝申し上げます。

横浜のドイツ文化によせて

学生会員 阿部 菜月



10月18日(土)、ドイツ学園で開催されたオクトーバーフェストにお招きいただきました。今回は私にとって初めてのドイツ学園訪問で、校門をくぐった瞬間、まずその広大な敷地と立派な校舎に圧倒されました。聞こえてくるドイツ語の会話に「ここは本当に日本なのだろうか」と思うってしまうほど、特別な雰囲気包まれていました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、会場は終始活気に満ちており、たくさんの屋台やDJブースが並び、グラウンドは多くの人で賑わっていました。小雨の中、子どもたちが楽しそうに走り回り(ドイツの方はどうしても傘をささないのか未だに不思議です)、来場者の笑い声があちこちから聞こえてきて、雨を感じさせないほどの温かい空気が流れていました。

今回は恐れ多くもVIP待遇でご招待いただき、ドイツ学園の先生方や生徒の皆さんから温かいおもてなしを受けました。お食事はWurst、Kartoffelsalat、Brötchen、Knödelsuppeなど、どれも本場の味わいで、ドイツの家庭料理を思わせる優しい味でした。そして何よりも印象的だったのが、ドイツらしい少し強めの塩味!思わず「懐かしいな」と感じながら、BierやRadlerが一層すすんでしまいました(笑)。



ドイツ大使(最後列)と

また、いつもお世話になっている会員の皆さまとゆっくりお話しできたことも嬉しいひとときでした。普段はなかなかゆっくり話す機会がない方々とも、同じテーブルを囲みながらお互いの近況やドイツとのご縁を共有し、改めてつながりの大切さを感じました。さらに、今回は神奈川大学の学生2名ともご一緒し、若者会員の交流を広げることができました。同じ学生という立場ながら、それぞれの目標やモチベーションは様々異なるので、とても刺激を受けました。

そして何よりも印象深かったのが、ジグムント大使にご挨拶する機会をいただけたことです。恐れ多くも学生にまで丁寧な名刺をくださり、一人一人に時間をかけてお話しいただき、大変感銘を受けました。短い時間の中でも、個人的に、中国での研修の話をさせていただいたり、10月末に予定している講演会についてご相談したり、今後の私のキャリアについて貴重なアドバイスをいただいたりと、本当に充実した時間でした。ドイツ語を勉強していて良かったなと感じました。

オクトーバーフェストを通して、ドイツ文化やドイツと横浜の繋がりを自分の目で見て、食べて、対話をして学ぶことができ、一層ドイツ愛/横浜愛が深まりました。今後もこの素晴らしい横浜とドイツのご縁が続くように、私個人もより一層日独関係に貢献したいと思います。今回の貴重な機会を提供してくださった関係各所の皆様に厚く御礼申し上げます。

☆☆☆

大堀 聰氏講演「日本のドイツ人の歴史」は掘出物の知識がいっぱい！



理事 中野 繁

11月15日(土)開催の講演会は、当協会常務理事の大堀聰氏による「日本のドイツ人の歴史～戦時下の横浜、湘南、軽井沢を中心に～」でした。

当協会の会員には、ドイツ滞在・留学の経験のある方や、ビジネス・文化交流等を通じてドイツについての深い知見をお持ちの方も多いと思いますが、当講演の内容は「これまで日本に滞在してしたドイツ人」という切り口から、地元横浜市や神奈川県に関連する事績を紐付けて掘り下げた内容で、「なるほどそんな身近な所に、ドイツと関連した歴史や史蹟があったのか。」と、地域への認識を新たにされた方も多かったのではないかと思います。

日本の明治維新(1868年)とほぼ同時期に国家統一(1871年)を果たし、近代国家としての道を歩み始めたドイツにとって、日本への進出が米英仏等に後れを取ったのはやむをえないところで、それが往時の山下町外国人居留地の各国出先機関の所在地に色濃く反映されていたことは、興味深い事実でした。

その後の在日ドイツ人社会は、第一次世界大戦(1914～1918年)での交戦国という試練を経て、関東大震災(1923年)後、一旦は横浜と比べれば被害の少なかった東京へ移転したものの、海運万能の時代、世界に開かれた窓であった港町横浜へ、徐々に回帰していったというストーリーには、納得感がありました。

第二次世界大戦(1939～1945年)時のドイツ豪華客船シヤルンホルストの日本海軍航空母艦神鷹への改装とか、封鎖突破船ウッカーマルクの奮闘、仮装巡洋艦トールによる通商破壊活動などは、個人的には興味津々なのは是非別の機会に話しをお聞きしたいところなのですが、それはさておき、明治期のお雇い外国人医師ベルツ、旧制高校ドイツ語教師フリッツ・カルシュ、建築家ブルーノ・タウト、実業家ベルンハルト・モーア……等々の著名在日ドイツ人の紹介は、それぞれ大変興味深く印象に残りました。

ラチエン商会を起業したルドルフ・ラチエン紹介のところで、「メルセデス 770 グローサーを皇室へ納品」(1935年)とあったことで、五木寛之の小説「メルセデスの伝説」を思い出しました。この車両とは別物かもしれませんが、往時皇室にはグローサーをベースにした御料車が3台あり、外装は赤黒基調、内装は西陣織・漆塗りで、内1台は空襲で被災、被害を免れた2台の内の1台が、ベンツ社の要請でドイツに里帰りしたと聞いたことがあります。

もう時効だから書いても大丈夫でしょうが、往時海外出張中に、用もないのにシュトゥットガルトのメルセデス・ベンツ博物館まで押しかけ、ドイツ皇帝の銀色のグローサーと、赤・黒でシックな「陛下のメルセデス」が並んで展示されているのをしみじみ鑑賞したことを思い出しました。

話を講演内容に戻しますと、箱根芦ノ湖畔の箱根駅伝ミュージアムが、ドイツ人実業家バウル・シュミットの別荘跡地とは知りませんでした。今度箱根方面までドライブした際には、是非立ち寄ってみたいと思います。

今回の講演は、実に情報盛りだくさんという印象でした。今回得た知識を携えて、改めて市内・県下に残る来日ドイツ人に関わる旧跡を訪ねて回るのも一計かもしれません。

大堀常務理事の知識にはまだ奥がありそうですので、いつかまた改めて講師を務めていただきたいと思います。



秋の都内散策

会員 北島 綾子

11月5日10時30分 JR 目黒駅中央改札口に集合しました。駅前から徒歩で国立自然教育園前へ向かい、東京都庭園美術館に入園しました。当日は建物内での行事が組まれていた為、中に入れず庭園の見学となりました。旧朝香宮の邸宅であったため見学出来ず残念。代わりに新館のカフェで美味しいお茶とお菓子をいただき、庭とギャラリーの見学をしました。

慶應義塾大学へ

自然教育園前からバスで慶應義塾大学へ。慶應義塾大学での構内見学です。南校舎の下から階段を上り図書館旧館横を通り北館へ、レストラン「ファカルティクラブ」(卒業生・教職員用)、ひとりでも外部者でもオーケーだそうで、ここで皆さん休んでお昼とコーヒーをいただきました。家族の話や猫の話、私のいたグループは猫を飼っている人が多かった、楽しいお喋りでした。

食事の後は三田演説館、ここでサルトルとボーボワールが講演したとのこと。はるか昔、懐かしいですね。



次は新しい図書館、メディアセンターです。中に入り遠山音楽文庫40周年記念の展示を見学、図書館旧館二階で福沢諭吉記念慶應義塾の記念歴史展示の見学、萬來舎が混んでいたため、最後はカフェ八角塔でお茶です。



これで見学は終わりです。キャンパスは敷地の割に建物が多く、あちこちまごまごしましたが、銀杏が色付き始め、第一校舎から西校舎へ向かう通りは黄色の銀杏の木々と落葉で素敵な眺めでした。

秋の散策を企画してくださった寺澤先生と文化委員の中尾さんに感謝いたします。

福祉で日独交流

顧問 大瀬 克博

昨年1月に東京六本木ヒルズでNPO法人・日本ライフサポーター協会主催の新春講演会が開催され、横浜日独協会が協賛参加しました。同協会は福祉、医療、保健の分野に携わる人たちの専門的資質向上と活動の場を広げる事業を行っています。事業の一つに生きいき実践講座があり、その新春最初のイベントでした。



講演は昨年1月15日、六本木ヒルズのハリウッド美容専門

学校セミナールームで行われました。講師はドイツバイエルン州にある山川高齢者施設理事長の山川和子氏、演題は「ドイツの美しい町に高齢者福祉施設をプレゼントした日本人実業家」で70名を超える参加がありました。

山川氏は若い頃にパリでビジネス経験を重ね、日本に帰国して結婚、1970年に夫妻で輸入品販売会社モンリーブを設立しドイツのシュニール織タオル・フェイラーの販売を始めました。同社は「生活の中に芸術を」をビジョンとして、斬新な想像力とあくなき探求心で商品開発に取り組み、従業員200名規模に成長しました。そして町工場だったドイツのフェイラー社は日本販売の増大により世界ブランド企業に育ったのです。

山川夫妻は2007年にモンリーブ社を総合商社に譲渡しビジネスから引退、恩義を受けたフェイラー社と地元ホーエンベルク市への恩返しを決意します。市が抱える高齢者問題、その解決に高齢者介護施設、山川高齢者ホームYSH、を建設します。これが最初のプロジェクトで2017年に完成、次に高齢者用スポーツ健康増進施設を2023年に完成させ、現在はバリアフリー高齢者集合住宅の建設に取り組んでいます。これら慈善事業は昨年のドイツ公共放送ZDFテレビで紹介され山川氏が出演しました。



昨年9月、日本ライフサポーター協会職員3氏がドイツ・ホーエンベルク市の山川高齢者ホームYSHを訪問しました。施設見学後には地元ホー

エンベルク市長の参加を得て福祉専門家による会議が開催されYSHそして東京都の福祉施設運営について情報交換が行われました。YSHの明るく美しい居住環境、おしゃれを楽しむ入居者、地域共生に留意した高齢者施設、など協会訪問者が持った印象です。このような交流がより良い高齢者社会構築に役立つことを期待します。

横浜日独協会の縁結びで実現した日独交流です。

海を渡った日本文化の広がり（2）

常務理事 寺澤 行忠

パリ国際大学都市・日本館



国際大学都市は、1925年にフランスの文化大臣の提唱によって建設されたもので、世界各国の学生や研究者に宿舎を提供し、文化や学術の交流を推進することを目的としている。34ヘクタールの広大な土地に40の建物があり、

その中にはハインリッヒ・ハイネ（ドイツ）館、アメリカ館、インド館などとともに日本館がある。敷地内には、郵便局、レストラン、図書館、プール、テニスコート、体育館などが整備されている。全体で130か国、約5,500人の学生や研究者が居住している。

駐日フランス大使を務めた劇作家、詩人のポール・クロードの提唱で、実業家・薩摩治郎八の資金援助によってつくられた日本館は、日本古来の城壁を模した7階建の建物で、館内には藤田嗣治の大作が飾られている。建物は周囲に作られた日本庭園と共に、国際大学都市の一角に、日本的な雰囲気を醸し出している。

こうした施設は、学術研究や文化交流を側面から強力に支援するもので、文化に対してフランスがもつ見事な見識である。

イリノイ大学「日本館」



アメリカのイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校には、大学から提供された土地に、大きな日本庭園を持つ「日本館」（ジャパンハウス）が建設されている。建物には「清光庵」など2つの茶室や、10畳大広間などもある立派な施設である。

1964年に佐藤昌三名誉教授がイリノイ大学に招かれ、日本のさまざまな伝統文化を24年にわたって教えた。その後を郡司紀美子教授が引き継ぎ、茶道その他の日本文化の指導にあたった。講義にはさまざまな専攻の学生が集まる。春と秋に、地元の人々を数百人招いて茶道や生け花のデモンストレーションを行うなど、日本文化関連のイベントを通じて、対日理解の促進を図る大きな拠点になっている。

ニューヨーク・ジャパソサイエティー（日本会館）

1907年に創設され、100年余りの歴史を持つ。国連本部に近い現在の建物は、ロックフェラー3世が無償で土地を提供、吉村順三の設計で、1971年に完成したものである。

日米間の相互理解と友好関係を深め、日本の思想、芸術、科学、産業、経済環境に対するアメリカ人の理解を促進することを目的として活動する。日米各界より著名人を招いて講演会やパネル討論会を催したり、展覧会・映画を開催したりするなど、多彩な活動を行っている。

日本語講座の受講生の年間登録人数は2,000人を超える。図書館は、日本について主に英文で書かれた書籍、約14,000冊を所蔵している。

ロサンゼルス・日米文化会館



リトル・トーキョーに、日米文化会館がある。日本の格調高い芸術、精神面の伝統を継承し、日本文化を広くアメリカに紹介、普及することによって日米間の相互理解

を深め、日米友好関係を強化することを目的に、1980年から83年にかけて建設された。

6階建ての本館、880席の劇場、イサム・ノグチのデザインによるプラザなどから成る。ここで竹細工展、浮世絵作家展、益子焼展、漆塗り展、沖縄のテキスタイル展など、さまざまな催しが行われる。展示会を開くと、1か月で約3,000人の入場者がある。

ロサンゼルスにおける日系社会の文化センターの役割を果たしている。

北京外国語大学「日本学研究センター」（大平学校）



1979年に当時の大平正芳首相が北京を訪問した際、日本語教育の支援を約束した。ODA援助

のかたちで5年間に10億円が投じられた。この「日本語研修センター」は、のちに大平首相に敬意を表して、「大平学校」と呼ばれるようになった。

その後大学院を加えて、「大平学校」を継承・発展させたのが北京外国語大学「北京日本学研究センター」である。ここからの卒業生が、いま中国における日本語教育と日本研究の中核的人材となっている。

中国における日本語学習者は年間100万人、訪日客は800万人をともに超え、国別にみると最多である。政治が難しい局面にあっても、それを跳ね返すのは、一般国民の間に築かれた強い絆なのであり、長い歴史を持つ隣国との親善、協調に力を注いだ大平元首相の施策は、未来を見据えた慧眼というべきであろう。

文化委員会企画

教養講座「日本文学逍遥」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- ・1月7日(水) **百人一首かるた会**
神奈川県民センター604室
(横浜駅西口徒歩5分、午後1時～3時)
- ・2月4日(水) オンライン講座
- ・3月4日(水) オンライン講座
- ・4月1日(水) オンライン講座

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

2025年度の会費が未納の方は、お手元の払込取扱票、又は下記の口座へお早めにお振込ください。会員の皆様とともに草の根の国際交流をすすめていくためにはこの会費はとても大切です。宜しくお願い致します。

- ◆ 郵便振替口座： 00240-3-138647
- ◆ ゆうちょ銀行： 店名〇九八(ゼロキュウハチ)
番号2441596
- ◆ 横浜銀行： 横浜駅前支店 普通6416667

新入会員

- ・保井 和毅 様(2025年10月入会)
- ・東 春香 様(11月入会 学生会員)
- ・勝呂 泰郎 様(11月入会 学生会員)



Instagram
情報発信中!

認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2026.1.1(第77号)

所在地:〒247-0007

横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1 地球市民かながわプラザ

NPOなどのための事務室内 事務局:津澤

Tel: 080-7807-7236

会報編集責任者: 山口 利由子

E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com

横浜日独協会ホームページ <https://jdgy.sub.jp>



編集後記

明けましておめでとうございます。
旧年中は大変お世話になりました。
年4回の会報ですが、興味深い記事を送っていただき何とか毎回無事に発行できています。

今年もよろしくお願いいたします。(山口)



イベント予定

■1月

- ・日時: 1月17日(土) 15:00～16:45
- ・会場: 川崎市総合自治会館 大会議室2
(武蔵小杉駅より徒歩2分)
- ・講師: 成川 哲夫氏 横浜日独協会 会長
- ・演題: 永続対立の時代をどう生きるか
—米中対立下で揺れる日米・日中関係とドイツの対米・対中関係、「平和の配当」の終焉
冷戦後の「平和の配当」が終わりつつある中、米中対立やロシアの侵攻、高市政権とトランプ政権、ドイツの Zeitenwende による安全保障転換、財政と金利の不安定化に揺れる国際秩序を日独比較で読み解き、企業と市民に何が問われているかを考えます。
- ・参加費: 無料 会員以外の方も参加出来ます。
(但し会員優先)

■2月

- ・日時: 2月21日(土) 15:00～16:45
- ・会場: 技能文化会館 801号室
(JR関内駅より徒歩5分)
- ・講師: 佐藤 守彦氏 横浜日独協会 会員
湘南鎌倉病院 感染症内科部長
- ・演題: 未定(1か月程前にメール連絡致します。)
- ・参加費: 1000円 会員以外の方も参加出来ます。
(但し会員優先) 学生無料

■3月

- ・日時: 3月21日(土) 15:00～16:45
- ・会場: 未定
- ・講師: 小野 竜史氏 横浜日独協会 会員
慶応義塾大学 専任講師
- ・演題: 自由に限界はある(べき)か?
—ベルリンについての「私的」観察から
現在のベルリンは良くも悪くも、とても自由な(自由すぎる?)街です。講師の体験や印象も交えてその現代史と現在を紹介し、「自由とその限界」について考えます。参加者の体験や印象、意見も聞きつつ、双方向でざくばらんにお話しできればと思います。

法人会員(順不同)

株式会社文芸社	ウインクル株式会社	ボッシュ株式会社	トルンプ株式会社	公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見	モトスミ・ブレイメン通り商店街振興組合		横浜国立大学一成長戦略研究センター	
株式会社コトブキ	神奈川大学	日本バウシュ株式会社	一般社団法人如水会 横浜支部	日独産業協会(DJW)
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株)		富士・フォイトハイドロ株式会社	フェリス女学院大学	